

# “仕舞う”収納の道具文化史 ㉖

GKデザイングループ

道具文化研究所 所長 藤本 清春

インドに仕舞われた「文明の遺伝子」

## 「零の発見」から 「IOT時代牽引国家」まで

長い歴史に熟成された「多文明」の地層

インダス文明にその歴史を発し、今や世界第2位の人口を持つインド連邦共和国。そして日本にとってはかつて「天竺」と呼ばれていた「仏教」伝来の源。一方、古代インドにおける「零の発見」は、人類文明史上に巨大な一步を記した。さまざまな王朝時代から英國統治時代まで、長い歴史を辿ってきたインドには、その間に熟成された「多文明」の地層が、厳然と息づいているのである。そのようなインドの長い歴史と現代の断面を示した展覧会を訪れる機会を得た。2017年2月より東京・六本木の「森美術館」で開催された「N·S·ハルシャ展・チャーミングな旅」である。

多民族・多言語・多宗教の国家を象徴する「193台のミシン」

広い展示空間を構成する壁面の見事な「展示棚」と床一面に設置された「193台のミシン」。そこには現在の「国際連合加盟国」193ヶ国の国旗が飾られている。「ミシンは近代文明の象徴であり、それが世界各国に広まり、現代の世界文明を形成してきた」と、南インドの古都マイスールを拠点とする作家ハルシャは語る。「棚収納文化」の妙味を活かした展示手法もあっぱれながら、そこに表現された現代のインドが直面する「多民族・多言語・多宗教国家における諸課題」、そしてそれらを通じて発信された「現代文明への批判」が聴こえてくるかのようであった。

未来に花咲かせようとする「文明の遺伝子」は「暮らしの真実」にあり

すでに世の中は「IOT時代」へ移行中。グローバル経済の波及から、高度情報時代への警鐘が「193台のミシン」に象徴される一方で、その対極にある作品群「繰り返し描かれる日々の営み」等には、出産から死に至るまでの人間の多様な日常的行為の「反復」する有様や、来世に繋がる「輪廻転生」の觀念が表現されている。そこには「人間の生きる原点は日常にあり、その絶え間なき繰り返しの中に『暮らしの真実』がある。故に未来を牽引するいかなる国家にあっても『文明の遺伝子』を内包した『暮らしの真実』をこそ、『チャーミングな旅』へと実現せねばならないのだ」とのメッセージが込められていた。



繰り返し描かれる日々の営み



193台のミシン

お客様の多様なニーズにお応えする製品情報や納入事例、ニュースリリースなどを紹介しています。  
本誌に関するご意見・ご要望は下記ホームページからお寄せください。  
カタログのご請求やお問い合わせについても、こちらからご利用いただけます。

URL <https://www.nipponfiling.co.jp>



価値ある保管システムへの提言

## Better Storage



- 1 特集／図書館  
成城大学法学資料室のリノベーション  
～大学学部資料室改修の一例として～  
成城大学法学資料室 隅本 守
- 5 図書館探訪  
豪雨災害を乗り越え、より充実した図書館へ  
常総市立図書館
- 8 物流フロンティア  
正確で迅速な流通加工を実現  
株式会社日本アクセス 浜松TPLセンター
- 11 特集／物流  
連載 次世代ITとロジスティクスシステム 6  
商品マスターが変える次世代物流サービス  
カストプラス株式会社 代表取締役社長 田中 伸治
- 15 “仕舞う”収納の道具文化史 ㉖  
インドに仕舞われた「文明の遺伝子」  
「零の発見」から「IOT時代牽引国家」まで  
GKデザイングループ 道具文化研究所 所長 藤本 清春

# 特集

## 成城大学法学資料室のリノベーション ～大学学部資料室改修の一例として～



成城大学法学資料室  
隈本 守 (くもと まもる)  
成城大学法学部卒、同法学研究科修了(修士)  
専門は刑法・刑事法  
学部学生時代より法学資料室を利用し、1993年より現職

成城大学法学部では、2016年9月までに、法学資料室を法学部のある5号館の1階片面から地下1階全面に拡充・移転した。今回は、この拡充・移転が、法学部の先生方や大学、学園、多くの業者の皆様と時間をかけ討論を重ねながら進められた経緯を「法学資料室のリノベーション」として紹介させて頂く。

### 法情報専門の資料室

成城大学法学資料室は法学専門図書館ではあるが、主として判例集、法令集、論文集などの資料と、データベースなどの資料・情報を提供するため、「法学資料室」となっている。資料以外の図書の類は大学図書館に所蔵し、資料室には学習に利用する基本的な図書を少数、使いやすく配架している。

近年、大学では中央図書館等に学部資料室が統合され、大学の図書・資料の一元管理が主流となっている。また、アメリカのローライブラリーにおいてもその規模を縮小する流れがある。今回のリノベーションに先立つ視察で訪れたスタンフォード大学ローライブラリーの故ポール・ロミオ氏によると、「ローライブラリーが統合、縮小化している時代に、成城大学法学部がローライブラリーを拡充しようとしていることが興味深い」とされていた。アメリカでは判例集など大部の資料について、データベースの利用が進んでいることもあり、冊子体資料を閲覧する図書館としてはその規模を縮小する流れとなっている。

このような流れに逆らうかたちで、成城大学法学部が、大学図書館とは別に法学資料室を拡充させた背景には、法学部の学生に「調べては考え、また調べる、その繰り返しの中で探求心と法学的思考回路を形成してほしい」との思いがある。また

学習、研究において、膨大な資料の中から与えられたテーマに即した法情報を探すには、法学や法情報の知識を持ったライブラリアンによるサポートが必要であり、法学資料室を別に整備することに大きな意義があるとされた。さらに法学の学習は元来、積極的な情報収集をもとに人との議論、発表や意見交換を通して新たな情報を得、考察を深めるアクティブなものであることから、この資料室には、学生が議論し、発表等の準備までを行う場所と機器を備えた新しい学習環境を提供したいという思いも反映された。

### リノベーションの必要性

法学資料室のリノベーションは急にわき上がった話ではない。1996年頃から法学部内では、法学資料室の利用・所蔵環境には改善の必要性があると認識されていた。

### ●スペース不足

すでに20年前より法学資料室の所蔵容量は限界を超え、資料の多くが別の部屋に分けて保管されていた。別置された資料は、職員が取りに行っていたが、この状況は単に不便というより、利用者が資料を直接見ることが困難という問題を含んでいた。

### ●荷重対策

以前の資料室は建物としての2階部分にあり、床の強度に対して荷重の問題があった。所蔵容量対策としては集密書架の設置が望まれたが、そのような荷重をかけることはもとよりできなかった。そこで「建物への負担を増やさない形で集密書架の設置に必要な床の補強が可能な場所」として建物の1階部分(地下1階)への移転が構想された。

### ●東日本大震災による被害

2011年3月の震災では、書架の転倒、大量の資料の落下などの被害が発生した。このとき資料室の荷重の問題が問いただされ、荷重軽減が求められたことも今回のリノベーションの契機の一つとなっている。

### 構想の具体化に向けて

法学部内では震災前より「これからの法学資料室はいかにあらるべきか」についての議論が盛んに行われていた。ここで特筆しておきたいことは、当時の法学部長はじめ先生方が法学資料室の重要性を認識され、拡充移転に向け主導的な役割を果し、資料室員と共同して準備を進めて頂いたことである。

法学資料室のあらるべき姿についての学部としてのコンセンサスを形成するため、学部内の関連する委員会で、先生方と資料室のライブラリアンが議論を重ねた。また大学、学園当局に対しては、法学部長が中心となって資料を倉庫等に保管するのではなく、今回のようなリノベーションの必要性を説明して頂き、協議を進めて頂いた。業者との話し合いにも法学部長や担当の先生方が参加し、望ましい環境の実現をバックアップして頂いた。

### ●海外のローライブラリー視察

2013年秋、法学資料室のあり方を検討するため、資料室員がアメリカ西海岸の各所のローライブラリーを10日間にわたり視察し、資料室委員長にはオーストラリアのローライブラリーを視察して頂いた。視察を通じて法情報提供の重要性、データベース化への対応、ローライブラリアンの必要性等を改めて確認し、多角的に検討したことがリノベーションに活かされた。

### ●基本プラン

基本プランでは、膨大な判例集、論文などが直接目に触れられる集密書架と、活発な議論を行える場との両方が一体となった、新しい法学資料室が思い描かれていた。限られたスペースでそれを実現するため、西側に集密書架、東側に閲覧やグループ学習のできる利用スペースを設け、その間をガラスで仕切ることによって法学資料室全体を1つの空間としてとらえられるように配置した。(図1参照)

このレイアウトは、20年前の原案に近いが、大きく異なる点は、利用スペースの一部にスタディルーム等、友人や先生方と話し合える場所と機器類を設けている点だ。これは情報のインプットからアウトプットまでをサポートする資料室にするという考えを形にしたものであり、また時代の流れに伴う変更

点ともいえるだろう。

### リノベーション後の法学資料室

基本プラン通りコンパクトスタックエリア(集密書架エリア)には、冊子体資料が保管され、学生が自由に利用できる開架仕様となった。東側の閲覧等の利用スペースでは、一番奥が個別に静かに学習・研究のできるキャセルスペース、次に資料等を閲覧するリーディングスペースがあり、その周辺の書架には利用頻度の高い判例集、法令集や基本書、参考図書、国家試験用の問題集などが配架されている。スタディルーム1、2は複数の学生あるいは先生方も交えて議論をし、あるいはプレゼンテーションとその練習をする場である。グループ学習に利用されることが多いが、新しい機器の使い方も含めてより広く活用できるようにサポートしていきたい。

また、エントランス近くには雑誌を一覧でき、他の学生や先生方と話をするブラウジングスペースがある。カウンターではライブラリアンが学生に声をかけ、資料探しや機器類の操作をサポートすると同時にグループ、個人の情報交換の架け橋となるようにしている。さらに、ミーティングルームでは最新の視覚的・感覚的にイメージを操作する機器を使って自由闊達に議論を交わし、学習を深めていくことができる。

現在の利用者は学生が大半で、「明るくて居心地が良い」「資料が自由に見られる」と評価は高く、利用者数もリノベーション前の倍以上となっている。

今後はガイドなどを通して利用方法の説明・紹介をす

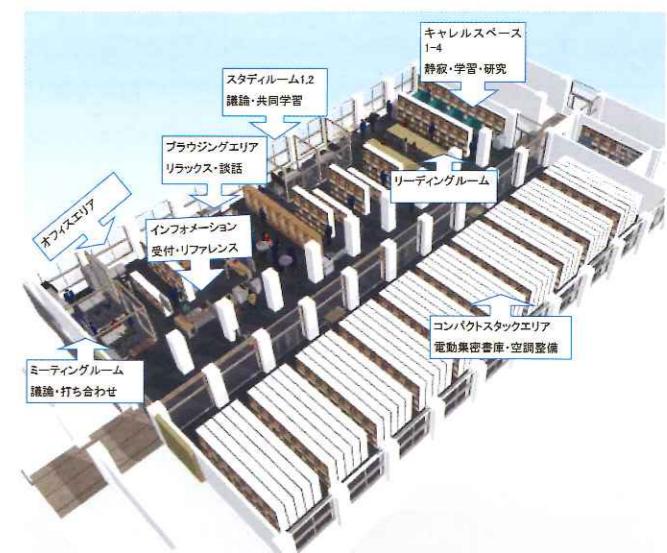


図1 法学資料室で検討時に作成した全体図



すめ、さらに利用が進むようにしていきたい。静穏な中にも明るい雰囲気で学生が法学の資料や情報を積極的に利用できる場として、親しまれる法学資料室となることを願っている。

#### リノベーション工事の留意点

法学部が思い描く法学資料室を形にするためには、設計、工事の打ち合わせに、利用者たる学部関係者が積極的に関与させて頂いたことが、結果的に極めて重要であったと考える。ここでは利用者とライブラリアンの立場から書架、什器、機器類、照明など細かな点まで「何のために」ということに留意した。

このため資料室で立体図面を用意し、学部内の意見を取りまとめ、これを提示しつつ、具体的なかたちで設計会社、大学

#### Column

##### 冊子体（紙媒体）資料を残すことの意義

インターネット等の普及により、判例、法令、論文等はデータベースでの利用が増えている。法学学習、研究のスタイルも今後はデータベースでよいのではないかとの議論もある。

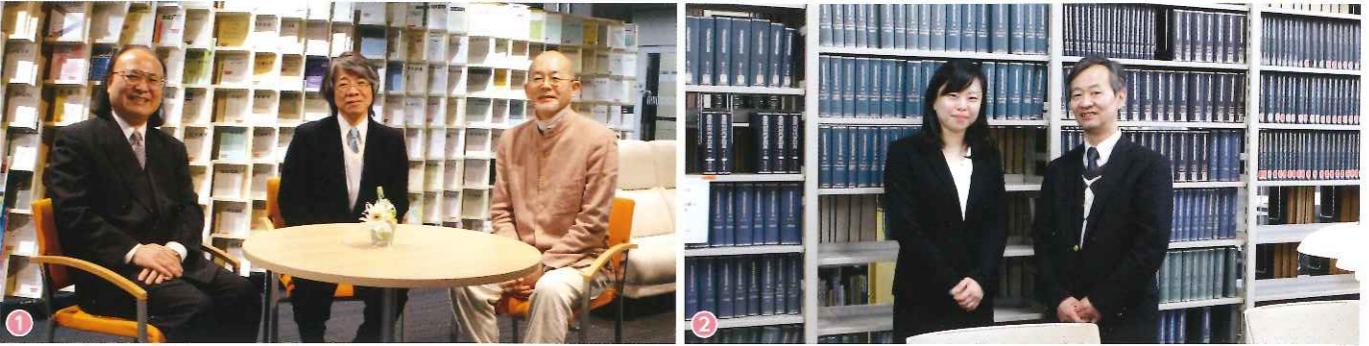
しかし、実際にはデータ化されているものは、紙媒体の資料との比較では多くはないばかりか、データベースに含まれない資料が、あたかも「存在しない資料」として見落とされる危険性すらある。このサポートの意味からも冊子体資料が資料室に整備されることの必要性はなお高まっていると認識している。

等の打ち合わせにおいて希望を伝えさせて頂いた。

##### ●集密書架の設置

リノベーション工事の最大のポイントは、資料の収蔵容量を増やす集密書架の設置である。所蔵必要資料数とこのための床の必要耐荷重については具体的な数値を挙げて要望を出し検討を重ねて頂いた。工事では建物に負荷をかけないよう書架用の基礎を新設し集密書架を整備したが、それ以外はほとんど内装の変更に止めることによって、経費の軽減を図った。とはいえ、この集密書架を電動としたことや、リーディングスペース等の固定書架を含むすべての書架に、白木木目調のシートを貼って頂いたことなどにより、利用者にやさしく、居心地の良い法学資料室のイメージが醸成された。

また、法学学習の面では、判例、法令、論文等が膨大な議論の積み重ねの上に成り立つものであり、これらの議論が時代とともに変遷してきたという認識を持つ必要がある。そのためには、資料をその量が目に見える形で保管しておくことに意味があると考える。いわば蓄積された議論の見える化である。さらに、新着雑誌などを一覧できるように並べておくと、利用者が特定の論文を手に取ろうとしたときなど、その近くにある雑誌や論文にも興味をもつ機会ができる。データベースでピンポイントに資料を取り出すこととは違う発見につながるという意味もある。



#### ●温湿度管理と空調

紙の資料を保管、運用する資料室として、カビ対策は大きな課題である。リノベーション後の法学資料室は、建物の1階部分になり、十分な除湿と、乾燥による資料の損傷を防ぐために温湿度を一定に維持することが不可欠となっている。

効率的な温湿度管理を実現するため、集密書架側と閲覧室側をガラスで仕切り、集密書架側には温度管理用エアコンのほか、通常の除湿器ではなく換気しつつ温湿度を一定に保つデシカシステムとサーチュレータを導入し、書庫内の温湿度環境を整備した。

#### ●資料の一時的外部保管

移転作業に伴い、法学資料室で管理する資料の約半分を一時に外部に預け、利用希望に応えて取り出す仕組みで運用した。この資料保管のための記録作成、搬出、保管、管理、取り寄せの仕組みなどは、日本ファーリングに依頼し、多難な作業を想像以上の配慮とともにに行って頂いた。

移転先資料室の新しい書架への配架作業についても、倉庫預け入れ資料と旧資料室に所蔵されていた資料を合わせる形で、同社に仕組み作りから作業まで、限られた時間の中で成し遂げて頂いたことが今回の移転の重要な要素となっている。



#### 変わり続ける法学資料室

法学資料室では、法学部が現時点で必要と考える設備とサポート環境が整備されたが、限られた予算の中で次年度に見送られた工事、作業もある。また法情報や法学教育に求められるものは不变ではない。法学部、法学資料室は、時の流行、潮流ではなく、学生、研究者を主とする利用者がこれからの法学学習、研究について求めるものを常に検討し、その要請に対応して行かなければならぬ。変化に応え、あるいはその先にあるニーズに取り組みつつ、サポート内容も含めて変わり続ける法学資料室が求められている。

最後に、法学資料室のリノベーションに関わってくださった学園、大学、法学部の先生方をはじめ、設計から施工、資料保管に至るまで、携わってくださったすべての方々のご尽力に心より感謝申し上げたい。

#### リノベーションのポイント

1. 関係者の理解と協力を得て議論を重ね、コンセプトを明確にする。
2. コンセプトにもとづき、図やイラストでリノベーション後の姿を具体化し、関係者の共通認識とする。
3. 設計や工事に関しては依頼者として、根拠のある数字、望ましい設備、什器などを調べ、本当に必要な部分に予算をかけ、リノベーションを充実させる。

#### DATA

##### 成城大学法学資料室

|       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| 開館    | 2016年9月（リノベーション後）                     |
| 構造・規模 | 鉄筋コンクリート造 地上5階<br>法学資料室は1階（運用上は地下1階）  |
| 建物面積  | 762.3m <sup>2</sup> （法学資料室のみ、地下書庫を除く） |
| 収蔵能力  | 約10万冊                                 |
| 所在地   | 東京都世田谷区成城6-1-20                       |